

逸脱する文学教材 —「嫉妬」篇—

Deviant Educational Texts in Field of Literature : Jealousy

鈴木 愛理*・仁平 政人*・平井 吾門*・山田 史生*
Eri SUZUKI*・Masato NIHEI*・Amon HIRAI*・Fumio YAMADA*

要 旨

平成20年1月の中央教育審議会答申を受けた現行の学習指導要領では、小学校・中学校で養い、豊かにしてきた「思考力や想像力」を、高等学校では「伸ばし」、さらに「心情を豊かに」することが求められている。また関心を深める対象が「国語」（小学校・中学校）から「言語文化」（高等学校）となっており、文化としての言語に対して広くかつ深い関心をもつことが高等学校における目標となっている。しかし「学校教育」「教科書」という制度・制約のもとでは、その不可能性からいくつかの限界が考えられる。国語科で扱える「感性や情緒」、「ものの見方、感じ方、考え方」、「想像」、「心情」、「言語文化」には限度があり、広がりや深みは制限されてしまう。そこで、「教科書」に掲載することは教育的配慮により不可能と思われるが、感情の本質に迫る作品を示すことで教材発掘の一助としたい。今回は、「嫉妬」を描いた作品として、現代文からは江戸川乱歩「白昼夢」、古文からは『今昔物語集』より「美濃国紀遠助値女霊遂死語」、漢文からは『聊齋志異』より「姚安」を提出する。

キーワード：国語科教育、現代文、古文、漢文

1. はじめに —高校の国語科が目指していること—

いま、国語科教育、特に読むことの教育では、どのようなことが目指されているのだろうか。

現行の学習指導要領のもとになっている平成20年1月の中央教育審議会答申において、国語科学習指導要領改善の基本方針は次のように示されている。

国語科については、その課題を踏まえ、小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語の教育としての立場を一層重視し、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるとともに、実生活で生きてはたらき、各教科の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることに重点を置いて内容の改善を図る。

特に、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文

化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。
(中略)

読書の指導については、読書に親しみ、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりするため、読書活動を内容に位置付ける。¹

以上からは、現在、国語教育においては「言語文化」を教材とした教育を行うことによって、「感性や情緒」、「ものの見方、感じ方、考え方」を広げ、深めることが求められていることがわかる。

これを受けて、国語科の目標は次のように掲げられた。

〈小学校〉

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる。

* 弘前大学教育学部国語教育講座
Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Education, Hirosaki University

¹ 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』
2010、p.2（下線、中略は引用者。以下同じ）

〈中学校〉

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め、国語を尊重する態度を育てる。

〈高等学校〉

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

目標は、「とともに」を境に二つの部分から構成されているが、前半は小学校・中学校・高等学校で共通しており、後半は生徒の発達の段階に応じて内容の深化が図られている。

小学校・中学校で養い、豊かにしていき「思考力や想像力」を、高等学校では「伸ばし」、さらに「心情を豊かに」することが求められている。また関心を深める対象が「国語」（小学校・中学校）から「言語文化」（高等学校）と、より幅広く捉えられている。文化としての言語に対して、広くかつ深い関心をもつことが高等学校における目標となる。

しかし、これらをどのように達成していくのかを考えると、「学校教育」という枠組みや「教科書」という制約のもとでは、その不可能性からいくつかの限界が考えられる。先述したように、国語科では「言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむこと」、「ものの見方、感じ方、考え方を広げたり、深めたり」すること、特に高等学校では「思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め」ることが求められている。しかし教科書で示される（扱える）「感性や情緒」、「ものの見方、感じ方、考え方」、「想像」、「心情」、「言語文化」には限度があり、広がりや深みが制限されてしまう。

たとえばある作品の教材としての適切性・妥当性は、教育の目標や内容と照らし合わせて導き出されるが、それが「教室」という場で読まれる以上、教育的配慮を度外視することはできない。文学作品のなかには、憎悪や嫉妬といった感情や欲望に伴い、攻撃的・猟奇的な行為に及んでしまう作品は数多くあるが、そのような作品を「教室」で扱うことは難しい。しかし憎悪や嫉妬という「心情」が本当に恐ろしいのは、常軌を逸した行動に人を駆り立ててしまうことであり、

それはある意味で「思考」や「想像」の余地がないほど緊迫したものである。そうした感情に対しても「思考力や想像力を伸ばし」ていくことが、真に「心情を豊かに」することにつながるのではないだろうか。

なお、「文学教育」というとき、そこには「文学で（何かを）教育すること」と「文学（そのもの）を教育すること」、両方の意味が含まれる。その後者を考える場合、その教育内容である「文学」とは何かということを考え出さねばならない。文学を定義することは容易ではないが、文学性を考えるうえでひとつの鍵となるのは現実からの逸脱であろう。文学には、現実にはありえないこと、あってはならないことも多く書かれている。つまり現実から逸脱した内容であることも多い。しかし同時に、それはある種の必然をもって差し出されている。文学は、ある現実を逸脱しながら、別の現実（純化された現実）を突きつけるものである。常識的にはなさそうなことや許されざるものが、あたかもそうあらざるを得ないことのように描かれている作品を用いなければ、そうしたことは教育することはできない（が、そうした作品は教材として扱われることがまずない）。

もちろん、教育的配慮がいらなくも言っているのではない。それは欠かせない配慮であるが、それによって達成しきれない部分があることに留意し、必要に応じてそれを補う策を備えておくことが大切であると考えるのである。なぜならそこにこそ、「教室」ごとの工夫を個々の教師がこらしてやらねばならないからである。

そこで本稿では、教科書には載りそうもない（全員が強制的に読まされるべきではないという意味で、載せてはいけぬ）けれども、人の感情の本質を描いている作品を教材案として示すことで、教材発掘の一助としたい。

（鈴木）

2. 現代文 —江戸川乱歩「白昼夢」—

【本文】

あれは、白昼の悪夢であったか、それとも現実の出来事であったか。

晩春の生暖かい風が、オドロオドロと、ほてった頬に感ぜられる、むし暑い日の午後であった。

用事があって通ったのか、散歩のみちすがらであったのか、それさえぼんやりとして思いだせぬけれど、私は、ある場末の、見るかぎりどこまでも、どこまでも、まっすぐにつづいている、広い、ほこりっぽい大

通りを歩いていた。

洗いざらした単衣物ひとえもののように白茶けた商家が、だまって軒を並べていた。三尺のショーウインドーに、ほこりでだんだら染めにした小学生の運動シャツが下がっていたり、碁盤のように仕切った薄っぺらな木箱の中に、赤や黄や白や茶色などの、砂たねもののような種物を入れたのが、店一杯に並んでいたり、狭い薄暗い家じゅうが、天井からどこから、自転車のフレームやタイヤで充満していたり、そして、それらの殺風景な家々のあいだにはさまって、細い格子戸の奥にすすけた御神燈の下がった二階家が、そんな両方から押しつけちゃ厭だわという恰好をして、ポロンポロンと猥褻な三味線の音を洩らしていたりした。

「アップク、チキリキ、アップッパア……アップッパア……」

お下げを埃でお化粧した女の子たちが、道のまん中に輪を作って歌っていた。アップッパアアアア……という涙ぐましい旋律が、霞んだ春の空へのんびりと蒸発して行った。

男の子らは縄飛びをして遊んでいた。長い縄のつるが、ねばり強く地をたたいては、空に上がった。田舎竈の前をはだけた一人の子が、ピョイピョイと飛んでいた。その光景は、高速度撮影の映画のように、いかにも悠長に見えた。

時々、重い荷馬車がゴロゴロと、道路や家々を震動させて私を追い越した。

ふと私は、行く手に当たって何かが起こっているのを知った。十四、五人のおとなや子供が、道ばたに不規則な半円を描いて立ち止まっていた。

それらの人々の顔には、みな一種の笑いが浮かんでいた。笑劇を見ている人の笑いが浮かんでいた。ある者は大口をあいてゲラゲラ笑っていた。

好奇心が、私をそこへ近づかせた。

近づくにしがたって、大勢の笑顔と際立った対照を示している一つのまじめくさった顔を発見した。その青ざめた顔は、口をとがらせて、何事か熱心に弁じ立てていた。香具師かぐしの口上にしてはあまりに熱心すぎた。宗教家の辻説法にしては見物の態度が不謹慎だった。いったい、これは何事がはじまっているのだ。

私は知らず知らず半円の群集にまじって、聴聞者の一人となっていた。

演説者は、青っぽいくすんだ色のセルに、黄色の角帯をキチンと締めた、風采のよい、見たところ相当教養もありそうな四十男であった。かつらのように綺麗に光らせた頭髪の下に、中高のらっきょう形の青ざめ

た顔、細い眼、立派な口ひげで隈どったまっ赤な唇、その唇が不作法につばきを飛ばしてパクパク動いているのだ。汗をかいた高い鼻、そして、着物の裾からは、砂ほこりにまみれたはだしの足が覗いていた。

「……おれはどんなにおれの女房を愛していたか」

演説は今や高潮に達しているらしく見えた。男は無量の感慨をこめてこう言ったまま、しばらく見物たちの顔から顔を見まわしていたが、やがて、自問に答えるようにつぶけた。

「殺すほど愛していたのだ！」

「……悲しいかな、あの女は浮気者だった」

ドッと見物のあいだに笑い声が起こったので、その次の「いつほかの男とくつつくかもしれなかった」という言葉はあぶなく聞き洩らすところだった。

「いや、もうとつにくつついていたかもしれないのだ」

そこで又、前にもました高笑いが起こった。

「おれは心配で心配で」彼はそうやって歌舞伎役者のように首を振って、「商売も手につかなんだ。おれは毎晩寝床の中で女房に頼んだ。手をあわせて頼んだ」笑い声、「どうか誓ってくれ。おれよりほかの男には心を移さないで誓ってくれ……しかし、あの女はどうしても私の頼みを聞いてはくれない。まるで商売人のような巧みな嬌態で、手練手管で、その場その場をごまかすばかりです。だが、それが、その手練手管が、どんなに私を惹きつけたか……」

誰かが「ようよう、ご馳走さまっ」と叫んだ。そして、笑い声。

「みなさん」男はそんな半量などを無視してつぶけた。

「あなた方が、もし私の境遇にあつたら、いったいどうしますか。これが殺さないでいられますか！」

……あの女は耳隠しがよく似合いました。自分で上手に結うのです……鏡台の前に坐っていました。結び上げたところです。綺麗にお化粧した顔が私の方をふり向いて、赤い唇でニッコリ笑いました」

男はここで一つ肩をゆすり上げて見えを切った。濃い眉が両方から迫って凄い表情に変った。赤い唇が気味わるくピン曲った。

「……おれは今だと思った。この好ましい姿を永久におれのものにしてしまうのは今だと思った。

用意していた千枚通しを、あの女の匂やかな襟足へ力まかせにたたき込んだ。笑顔の消えぬうちに、大きい糸切歯が唇から覗いたまんま……死んでしまった」

にぎやかな広告の楽隊が通り過ぎた。大ラッパが頓

狂な音を出した。「ここはお国を何百里、離れて遠き満州の」子供らが節に合わせて歌いながら、ゾロゾロとついて行った。

「諸君、あれはおれのことを触れまわっているのだ。真柄太郎は人殺しだ、人殺しだ、そういつて触れまわっているのだ」

また笑い声が起こった。楽隊の太鼓の音だけが、男の演説の伴奏でもあるように、いつまでも、いつまでも聞こえていた。

「……おれは女房の死骸を五つに切り離した。いいかね、胴が一つ、手が二本、足が二本、これでつまり五つだ……惜しかったけれど仕方がない……よく肥ったまっ白な足だ……あなた方はあの水の音を聞かなかったですか」男は俄かに声を低めて言った。首を前につき出し眼をキョロキョロさせながら、さも一大事を打ち明けるのだといわぬばかりに、「三七二十一日のあいだ、私の家の水道はザーザーとあけっぱなしにしてあったのですよ。五つに切った女房の死体をね、四斗樽の中へ入れて、冷していたのですよ。これがね、みなさん」

ここで彼の声は聞こえないくらいに低められた。

「秘訣なんだよ。秘訣なんだよ。死骸を腐らせない……屍蠟というものになるんだ」

「屍蠟……」。ある医書の「屍蠟」の項が、私の眼の前にその著者の黴くさい絵姿と共に浮かんできた。一体全体、この男は何を言おうとしているのだ。なんともしれぬ恐怖が、私の心臓を風船玉のように軽くした。

「……女房の脂ぎった白い胴体や手足が、可愛い蠟細工になってしまった」

「ハハハハハ、おきまりをいってらあ。お前それを、きのうから何度おさらいするんだい」

誰かが不作法に嘸鳴った。

「オイ、諸君」男の調子がいきなり大声に変った。「おれがこれほどいうのがわからんのか。君たちはおれの女房は家出をした家出をしたと信じきっているだろう。ところがな、オイ、よく聞け、あの女はこのおれが殺したんだぞ。どうだ、びっくりしたか。ワハハハハハ」

……断ち切ったように笑い声がやんだかと思うと、瞬間もとのきまじめな顔に戻ってきた。男はまた、ささやき声ではじめた。

「それでも、女はほんとうに私のものになりきってしまったのです。ちっとも心配はいらないのです。キッスのしたい時にキッスができます。抱きしめたい

時には抱きしめることもできます。私はもう、これで本望ですよ。……だがね、用心しないとあぶない。私は人殺しなんだからね。いつおまわりに見つかるかもしれない。そこで、おれはうまいことを考えてあったのだよ。隠し場所をね……おまわりだろうが刑事だろうが、こいつにはお気がつくまい。ほら、君、見てごらん。その死骸はちゃんとおれの店先に飾ってあるのだよ」

男の眼が私を見た。私はハッとして後を振り向いた。今の今まで気のつかなかったすぐ鼻の先に、白いズックの日覆い……「ドラッグ」……「請合薬」……見覚えのある丸ゴシックの書体、そして、その奥のガラス張りの中の人体模型、その男は、何々ドラッグという商号を持った、薬屋の主人であった。

「ね、いるでしょう。もっとよく私の可愛い女を見てやってください」

何がそうさせたのか。私はいつの間にか日覆いの中へはいっていた。

私の眼の前のガラス箱の中に女の顔があった。彼女は糸切歯をむき出してニコリ笑っていた。いまわしい蠟細工の腫物の奥に、真実の人間の皮膚が黒ずんで見えた。作り物でない証拠には、一面にうぶ毛がはえていた。

スーッと心臓が喉のところへ飛び上がった。私は倒れそうになるからだを、危うくささえて日覆いからのがれ出した。そして、男に見つからないように注意しながら、群集のそばを離れた。

……ふり返って見ると、群集のうしろに一人の警官が立っていた。彼もまた、他の人たちと同じようにニコニコ笑いながら、男の演説を聞いていた。

「何を笑っているのです。君は職務の手前それでいいのですか。あの男のいっていることがわかりませんか。嘘だと思えば、その日覆いの中へはいってごらんさ。東京の町のまん中で、人間の死骸がさらしものになっているじゃありませんか」

無神経な警官の肩をたたいて、こう告げてやろうかと思った。けれど、私にはそれを実行するだけの気力がなかった。私は眩暈を感じながらヒョロヒョロと歩き出した。

行く手には、どこまでもどこまでも果てしのない、白い大道がつついていた。陽炎が、立ち並ぶ電柱を海草のようにゆすっていた。

【解説】

日本探偵小説を代表する作家・江戸川乱歩(一八九四

～一九六五)の掌編小説。初出『新青年』第六卷第八号(一九二五・七)。本文は『江戸川乱歩全集』(講談社、一九七八・一〇)にもとづく。

本作に描かれる「何々ドラッグ」は、大正期に、独特の広告宣伝・商法で知られていた薬局チェーン「有田ドラッグ」をモデルとしている。この有田ドラッグの店舗では、性病者などの蠟細工の模型を店先に「見世物」のように並べており、好奇心からそれを覗きに来る客も多かったという(田中聡『衛生展覧会の欲望』青弓社、一九九四・八)。人間の死体が蠟人形のように装われ、大通り沿いのショーウィンドーの中に飾られているという本作の奇想が、こうした同時代の文化現象に立脚していることは見やすい。だが、本作で興味深いのは、犠牲者の身体にとどまらず、犯人、そして殺人の真相(の告白)までもが、隠されることなく人前に置かれているということである。全ての真実がまさしく白日の下にさらされていながら、人々がそれを真剣に受け止めることなく、ただ見世物として楽しみ続ける——本作の固有の無気味さは、何よりもここにあると言っている(そしてここに、例えば大衆社会状況などのメタファーを見ることも可能だろう)。

さて、作中の「男」は、妻を「浮気者」と見なし、その魅力的な姿を「永久におれのもの」にするために、彼女を殺害し、遺体を「屍蠟」化させて人形へと変える。だが、既に狂気の内にいるらしい「男」は、「ほんとうに私のもの」になった彼女の「好ましい姿」を独占しようとするのではなく、むしろ他人に積極的に誇示しようとする——「もっとよく私の可愛い女を見てやってください」と(言うまでもなく、殺人を隠蔽するためには、彼女が注目されることは避けるべきであるはずだ)。このことは、「男」の妻への「愛」が、他の男を魅了しうる(「いつ他の男とくっつくかもしれない」)ありように関わる——別言すれば、(仮想的な)他者の欲望を媒介として成立している——ことを示唆しているのではないだろうか。その意味で本作は、欲望と嫉妬の生じる機構を照らし出しているとも見られるのである。(仁平)

3. 古文 — 『今昔物語集』より「美濃国紀遠助値女霊 遂死語 第二十二」²—

【原文】

今昔、長門ノ前司藤原ノ孝範ト云フ者有リキ。其レガ下総ノ権ノ守ト云ヒシ時ニ、関白殿ニ候ヒシ者ニ

テ、美濃ノ国ニ有ル生津ノ御庄ト云フ所ヲ預カリテ知ケルニ、其御庄ニ紀ノ遠助ト云フ者有キ。

人数有ケル中ニ、孝範此ノ遠助ヲ仕ヒ付テ、東三条殿ノ長宿直ニ召上タリケルガ、其ノ宿直畢ニケレバ、暇取セテ返シ遣ケレバ、美濃ヘ下ケルニ、勢田ノ橋ヲ渡ルニ、橋ノ上ニ女ノ裾取タルガ立テリケレバ、遠助、「怪シ」ト見テ過ル程ニ、女ノ云ク、「彼レハ何チ御スル人ゾ」ト。然レバ、遠助馬ヨリ下テ、「美濃ヘ罷ル人也」ト答フ。女、「事付申サムト思フハ、聞給ヒテムヤ」ト云ケレバ、遠助、「申シ侍リナム」ト答フ。女、「奈喜ク宣ヒタリ」ト云テ、懐ヨリ小サキ箱ノ、絹ヲ以テ裏タルヲ引出シテ、「此ノ箱、方景ノ郡ノ唐ノ郷ノ収ノ橋ノ許ニ持御シタラバ、橋ノ西ノ爪ニ女房御セムトスラム。其ノ女房ニ此レ奉リ給」ト云ヘバ、遠助氣六借ク思エテ、「由無キ事請ヲシテケル」ト思ヘドモ、女ノ様ノ気怖シク思エケレバ、難辞クテ、箱ヲ受取テ、遠助ガ云ク、「其ノ橋ノ許ニ御スラム女房ヲバ誰トカ聞ル。何クニ御スル人ゾ。若シ不御会ズハ何クヲカ可尋奉キ。亦此レヲバ誰ガ奉給フトカ可申キ」ト。女ノ云ク、「只其ノ橋ノ許ニ御タラバ、此レヲ受取ニ其ノ女房出来ナム。ヨニ違フ事不侍ジ。待給フラムゾ。但シ、穴賢、努々此ノ箱開テ不見給ナ」ト此様ニ云立リケルヲ、此ノ遠助ガ共ナル従者共ハ、女有トモ不見ズ、「只我が主ハ馬ヨリ下テ、由無クテ立テルヲ」ト見テ、怪シビ思ケルニ、遠助箱ヲ受取ツレバ、女ハ返ヌ。

其ノ後、馬ニ乗テ行クニ、美濃ニ下着テ、此ノ橋ノ許ヲ、忘レテ過ギニケレバ、此ノ箱ヲ不取セザリケレバ、家ニ行着テ思出シテ、「奈不便也ケル。此ノ箱ヲ不取リケル」ト思テ、「今故ニ持行テ尋テ取セム」トテ、壺屋立タル所ノ物ノ上ニ捧テ置タリケルヲ、遠助ガ妻ハ嫉妬ノ心極ク深ケル者ニテ、此ノ箱ヲ遠助ガ置ケルヲ、妻然氣無クテ見テ、「此ノ箱ヲバ女ニ取セムトテ京ヨリ態ト買持来テ、我レニ隠シテ置タルナメリ」ト心得テ、遠助ガ出タル間ニ、妻蜜ニ箱ヲ取下シテ開テ見ケレバ、人ノ目ヲ捷テ数入レタリ、亦男ノ闌ヲ毛少シ付ケツ、多ク切入レタリ。

妻此レヲ見テ、奇異ク怖シク成テ、遠助ガ返リ来タルニ、迷ヒ呼寄セテ見スレバ、遠助、「哀レ、『不見マジ』ト云テシ物ヲ。不便ナル態カナ」ト云テ、迷ヒ覆ヒテ、本ノ様ニ結テ、ヤガテ即チ彼ノ女ノ教ヘシ橋ノ許ニ持行テ立テリケレバ、美ニ女房出来タリ。遠助此

² 本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)により、ふりがなも適宜引用した。

ノ箱ヲ渡シテ、女ノ云シ事ヲ語レバ、女房箱ヲ受取テ云ク、「此ノ箱ハ開テ被見ニケリ」ト。遠助、「更ニ然ル事不候ズ」ト云ヘドモ、女房ノ気色糸悪キニテ、「糸悪シクシ給フカナ」ト云テ、極ク瞋テ気色悪ク乍ラ箱ヲバ受取ツレバ、遠助ハ家ニ返ヌ。

其ノ後、遠助、「心地不例ズ」ト云テ臥シヌ。妻ニ云ク、「然許不開マジト云シ箱ヲ由無ク開テ見テ」トテ、程無ク死ニケリ。

然レバ人ノ妻ノ嫉妬ノ心深く、虚疑ヒセムハ、夫ノ為ニ此ノ不吉ヌ事ノ有ル也。嫉妬ノ故ニ遠助不思議ズ、非分ニ命ヲナム失ヒテケリ。女ノ常ノ習トハ云ヒ乍ラ、此レヲ聞ク人皆此ノ妻ヲ憶ミケリ、トナム語り伝ヘタルトヤ。 (『今昔物語集』巻27)

【現代語訳】³

結構むかしのこと。今で言う山口県知事を務めた藤原孝範という人がいた。彼がまだ千葉県で副知事のような仕事をしていた時、最高権力者である関白に媚びへつらっていた関係で、岐阜に関白が所有する保養地の管理も任されていた。その保養地の出身である紀遠助という人物が、この話の主人公に当たる。

藤原孝範は、たくさんいる家来の中でも特にこの遠助を買っていた。そのため、遠助に長期出張を要請して、京都の東三条にある御殿の警護を命じていた。やがてその任期も満了したため、孝範は遠助に休暇を与えて帰省させることになった。これは、その折の話である。

遠助が岐阜へと戻る際、勢田という場所にある橋を渡ろうとしたところ、橋の上に裾をまくって生足をチラ見せしている女性が立っているのを見かけた。遠助は「あの女、なんか胡散臭いなあ」と思って、無視してやり過ごそうとしたけれど、女性が話しかけてきてしまった。「あなたは、いったいどちらまで行かれるのでしょうか」。遠助は、仕方なしに馬を下りて、「岐阜に帰る途中ですよ」と答えた。さらに女性は「言付けをお願いしたいのですが、頼まれていただけませんか」と言うので、遠助は「お伝えいたしましょう」と引き受けた。女性は、「よかった、ありがとうございます」と礼を述べた後、絹で包んだ小さい箱を取り出して、次のように言った。「この箱を、道中にある『オサメ橋』まで持って行って下さい。橋の西側に女性がいるはずですよ。どうぞ、その人にこれを渡し

て下さい」。それを聞いた遠助は、何やら薄気味悪く感じて、「つまらないことを引き受けてしまったなあ……」と後悔した。けれども、女性の様子に鬼気迫る不気味さがあつたため、今更断ることも出来ず、箱を受け取った。遠助は、「その橋の付近にいる女性は何という名前ですか。そして、実際にはどこに住んでいるんですか。もし橋のところで会えなかった場合、どこに行けばいいんでしょう。というか、あなたのお名前は？」と矢継ぎ早に尋ねた。女性は、「とりあえず、その橋のところに行きさえしたら女性が現れますから。私の言うこと、疑わないでもらっていいですか。きっと待っているんですから。ちなみに、絶対にこの箱を開けて中を見ちゃダメですよ」とまくしたてた。さて、遠助に同行していた従者たちには、実は女の姿が見えていなかったのである(物の怪の類なんだろうね)。そのため、「うちの主人は、馬から降りてぶつぶつ独り言して、何やってるんだろ」と不思議がっていた。とにもかくにも、遠助が箱を受け取ったことで女性は去っていったのであった。

遠助は、再び馬に乗って進んでいき、やがてそのまま岐阜に到着した。つまり、約束をすっかり忘れて頼まれた橋を通り過ぎてしまったのだ。箱を手渡すことができず、家に着いてからようやく思い出した遠助は、「あら、申し訳ないことをしちゃった。誰だか知らないけど、この箱を心待ちにしてたんだろうなあ」と反省し、「今度、届けに行こう」と思った。ただ、それまでは邪魔なので、箱を物置にしまっておくことにした。さて、遠助には大変嫉妬深い妻がいたのだけど、この妻、遠助が箱を物置にしまったのをそれとなく見ていた。「あの女浮気してたんだ。この箱をどこかの女に渡すために、京都からわざわざ買ってきたんだ。しかも私に見つからないように、ちゃっかり物置に隠しておいたに違いないわ」と妄想が炸裂。遠助が出かけている間に、妻はこっそり箱を取り出すと、腹立ちまぎれに開けて見てしまった。ジュエリーか何かが入ってると思っていたのに、中には抉り取られた人間の目玉が無数に入っており、また、陰毛がほんのりと付いたまま切り取られた男根も大量に入れられていた。

それを見た妻は、気味が悪いわ恐ろしいわで、遠助が帰宅したら慌てふためいて呼び寄せ、箱の中身を見せつけた。「なにこれ、いったいどういうことなの」とね。遠助は、「ああ、何ということだ。見てはいけないと言われていたのに。申し訳ないことをしてしまったなあ」と言って、うろたえながら蓋をして、

³ 大幅に意識した。より正確な訳文については、『新編日本古典文学全集』(小学館)などを参照されたい。

もとあったように包装し直すと、すぐに例の橋のもとに持って行った。遠助が橋の付近に立っていると、どこからともなく、確かに女性が出現した。「京都からの帰りにとある女性から預かってきました」と言っただけでこの箱を渡したところ、女性は箱を受け取ってから、「まさか開けてませんよね」と尋ねた。遠助は、「まさかまさか」と言っただけで、女性はものすごく不機嫌になり、「最悪ですね」と言い捨てた。たいそう怒り狂った様子ではあったが、女性はとにかく箱を受け取ったので、遠助は逃げるように帰ってきた。

帰宅後、遠助は、「めちゃくちゃ気分が悪い」といって寝込んでしまった。妻に、「絶対に開けるなって言われてた箱だったのに……。つまらない理由で見ちゃダメでしょ……」と言うと、程なくして死んでしまった。

以上のように、妻の嫉妬心が深く、むやみやたらに疑うことで、夫にとってこんな不吉なこともあるものである。嫉妬心が原因となって、遠助は天寿を全うできずに、思いもよらぬ形で命を落とすことになってしまった。「嫉妬は女の常」とはよく言われることではあるけれど、一連の話を聞いた人は皆この妻を非難したものである、と語り伝えられているという。

【解説】

今昔物語集は平安末期頃に成立した説話文学であり、全31（現存28）巻、1000を超える話を収める。バラエティに富んだ説話集であり、様々な人間に纏わるドラマを生き生きと描き出しているが、性的な事象や現代の道德観からは捉えきれない事項も含まれているため、学校教材としては用い難い素材も多い。しかし、学校現場で忌避される題材にこそ、人間の本質やこの世の不条理を鋭く突いた古典の価値が宿っているとも言える。そして、そのようなものこそ、高校生を初めとした多くの人を惹きつける魅力を備えている。今昔物語集については全巻の翻刻も揃っているが、特に日本国内の事象を取り上げた「本朝部」については、各種の活字資料や現代語訳も充実している。大部の貴重書であるため、今なお活発な議論が進む研究対象でもある。

本話は、日本に伝わる仏教説話以外を取りまとめた、所謂「本朝世俗部」に属する。本話を収める巻27は最善本である「鈴鹿本」が現存する巻としても知られ、その内容については「京都界限の伝承を中心に広く霊怪譚を集録し、人間と超自然的靈性のかかわり合いを多角的に写している」「登場する霊鬼・妖獣は多

種多様で、その跳梁暗躍ぶりはまさに説話的叙述を借りた王朝百鬼夜行絵巻の感があり、霊鬼・妖獣との対決に腐心した世情人心をうかがうに足りる」⁴と指摘されている。

橋のたもとで怨霊に物品運搬を依頼されるという構造は昔話にも類話があり、話の筋も捉えやすい。今昔物語集の中では表現も内容も穏やかな部類だが、伏線を回収するわけでもなく、挙句の果てに、「むやみな嫉妬は良くないよね」と纏めあげる感覚は現代人には新鮮である。一連の説話が並ぶ中で、この話の「嫉妬」がどのような意味合いを帯びているのか。その考察を深めつつ、登場人物と語り手それぞれの感情を味わいたい。なお、教材としては性的な単語やジェンダーへの配慮に工夫が必要であろう。本話は、今昔物語集という後世多くの文人に創作意欲を沸かせた傑作説話集において、確かに意味のあるワンピースを為すものといえる。（平井）

4. 漢文 — 『聊齋志異』より「姚安」—

【原文】

姚安臨洮人、美丰標。同里宮姓、有女子字綠娥。艷而知書、扞偶不嫁。母語人曰、門族風采、必如姚某始字之。姚聞、給妻窺井、擠墮之。遂娶綠娥、雅甚親愛。然以其美也故疑之。閉戸相守、步輦綴焉。女欲歸寧、則以兩肘支袍、覆翼以出、入輿封誌、而後馳隨其後。越宿、促与俱歸。女心不能善、忿曰、若有桑中約、豈瑣瑣所能止耶。姚以故他往、則扞女室中。女益厭之、俟其去、故以他鑰置門外、以疑之。姚見大怒、問所自来。女憤曰、不知。姚愈疑、伺察弥嚴。

一日、自外至、潜聽久之、乃開鎖啓扉、惟恐其響、悄然掩入。見一男子貂冠臥牀上。忿怒、取刀奔入、力斬之。近視、則女昼眠畏寒、以貂覆面上。大駭、頓足自悔。宮翁忿質官。官収姚、褫衿苦械。姚破産、以具金賂上下、得不死。由此精神迷惘、若有所失。適独坐、見女与髻丈夫狎褻榻上。惡之、操刃而往、則没矣。反坐、又見之。怒甚、以刀擊榻、席褥断裂。憤然執刃、近榻以伺之、見女立面前、視之而笑。遽砍之、立断其首。既坐、女不移处、而笑如故。夜間滅燭、則聞淫溺之声。褻不可言。日日如是、不復可忍。於是鬻其田宅、将卜居他所。至夜、偷兒穴壁入、劫金而去、自此貧無立錫、忿恚而死。里人藁葬之。

⁴ 『日本古典文学大辞典』岩波書店、1984

【書き下し文】

姚安は臨洮の人にして、美しき丰標なり。同里の宮姓なるものに、女子有り、緑娥と字す。艶にして書を知り、偶を扱びて嫁がず。母、人に語りて曰く、門族風采、必ず姚某の如くにして始めて之に字せしめん、と。姚聞きて、妻を給きて井を窺わしめ、擠して之を墮とす。遂に緑娥を娶り、雅に甚だ親愛す。然れども其の美しきを以ての故に之を疑う。戸を閉じて相守り、歩めば輒ち焉に綴ぬ。女の帰寧せんと欲すれば、則ち両肘を以て袍を支え、覆翼して以て出で、輿に入れば封誌し、而る後に馳せて其の後に随う。宿を越せば、促して与に俱に帰る。女は心に善しとする能わず、忿りて曰く、若し桑中の約有れば、豈に瑣瑣たるにて能く止むる所ならんや、と。姚、故を以て他に往き、則ち女を室中に扃ざす。女益ます之を厭い、其の去るを俟ち、故らに他鑰を以て門外に置きて、以て之を疑わしむ。姚見て大いに怒り、自りて来たる所を問う。女は憤りて曰く、知らず、と。姚愈いよ疑い、伺察すること弥いよ厳し。

一日、外より至り、潜かに聴くこと之を久しうし、乃ち鎖を開き扉を啓くに、惟だ其の響かんことを恐るるのみにして、悄然として掩人す。見るに一男子の貂冠して牀上に臥す。忿怒して、刀を取りて奔り入り、力もて之を斬る。近づきて視れば、則ち女昼眠するに寒を畏れ、貂を以て面上を覆えるなり。大いに駭き、足を頓みて自ら悔ゆ。官翁、忿りて官に質す。官、姚を収め、衿を褫いて械に苦しましむ。姚は産を破りて、以て金賂を上下に具え、死せざるを得たり。此より精神迷惘し、失う所有るが若し。適たま独り坐せるに、女の髻丈夫と榻上に狎褻するを見る。之を惡み、刃を操りて往けば、則ち没す。反りて坐すれば、又之を見る。怒ること甚だしく、刀を以て榻を撃てば、席褥断裂す。憤然として刃を執り、榻に近づきて以て之を伺えば、女の面前に立ち、之を視て笑うを見る。遽かに之を砍り、立ちどころに其の首を断つ。既に坐すれば、女は処を移さずして、笑うこと故の如し。夜間に燭を滅すれば、則ち淫溺の声を聞く。褻しきこと言うべからず。日日是くの如くにて、復た忍ぶべからず。是に於て其の田宅を鬻ぎて、將に居を他所にトせんとす。夜に至り、偷兒、壁に穴あけて入り、金を劫いて去る。此より貧にして錐を立つる無く、忿恚して死せり。里人は藁もて之を葬る。

【現代語訳】

姚安は臨洮（山西省）の人で、すこぶるイケメンで

ある。同じ村の宮という家に、緑娥という娘がいた。才色兼備であったが、相手を選び好みして独り身である。母親は常日頃から「家柄からしても、風采からしても、姚さんのようではなけりや嫁にはやれん」といつていた。それを小耳にはさんだ姚安、妻をだまくらかして井戸をのぞきこませ、うしろから突き落とす。かくして姚は首尾よく緑娥をものにし、とてつもなく溺愛した。

ところが、緑娥があまりにもベッピンなもので、とめどなく嫉妬心をつのらせる。部屋に押しこめ、つきっきりで監視し、出歩くときもベツタリとくつついて片時もはなれない。緑娥が里帰りしたいといえば、姚安は両腕をつっぱって打ち掛けをひろげ、鳥が翼をひろげて緑娥のすがたをおおい隠すようにしながら家を出たかとおもうと、車に押しこむや否や扉をしっかりと封印し、さらに自分はその後ろから馬に乗ってピツタリついてゆく。おまけに一晩だけ泊まると、すぐさま帰ろうとせつつき、さっさと家につれもどす。緑娥はさすがに不機嫌になり、腹を立てて「もし浮気相手とデートの約束をしてるんだったら、どんなに帰ろうとせきたてられたって諦められるもんですか」と毒づく。

姚安が用事で外出するときには、鍵をかけた部屋に緑娥を閉じこめる。緑娥はいよいよストレスがたまり、姚安が出かけると、別の鍵を門の外に置いて、わざと怪しむように仕向ける。姚安は、案の定、鍵を見つけると怒り狂い、その出どころを問いたです。緑娥はムツとして「知らないわ」とうそぶく。姚安はますます嫉妬心をつのらせ、監視の目をさらに厳しくする。

ある日、姚安は外出からもどると、しばらく耳を澄ませて室内の様子をうかがい、やがて鍵をはずして扉をそっと開くと、足音をしのばせ、こっそり忍びこむ。見ると、ひとりの男がテンの毛皮の帽子をかぶってベッドに寝そべっている。姚安はカッとになって、刀をとって室内に走りこむと、力まかせに斬りつける。近づいて見てみると、緑娥が昼寝をしており、寒かったのでテンの毛皮の帽子で顔をおおっていたのであった。姚安はビックリ仰天、地団駄をふんで悔やんだが後の祭り。

官家の父親は、怒ってお上に訴える。役人は姚安を逮捕すると、官位を剥奪し、枷をはめて拘束する。姚安は全財産をはたいて、上から下まで賄賂をバラまき、なんとか死罪をまぬがれる。それからというもの姚安は、のべつボンヤリとし、腑抜けのようになる。

あるとき独りで坐っていると、女がヒゲの男とベッドのうえでイチャついているのが見える。怪しからんと押っ取り刀で駆けつけると、すがたは消える。元にもどって坐ると、またぞろ見える。頭に血がのぼり、刀でベッドに斬りつけ、布団をずたずたに斬り裂く。鼻息も荒くベッドに近寄ってみれば、緑娥が目のまえに佇み、こっちを見てニッコリ。姚安はやにわに斬りつけ、その首を斬り落とす。元にもどって坐りなおすと、緑娥がさっきと同じ場所で、さっきと同じようにニッコリ。さらに加えて、夜になって灯りを消すと、男と女とが逢い引きするらしいピチャピチャというイヤらしい声がしきりに聞こえる。そのエロいことといたら言語道断である。

そういうことが毎日毎晩つづく。姚安はもはや辛抱たまらんと覚悟し、屋敷も田畑も売り払い、どこかへ引っ越そうと決心する。その晩、ドロボウが壁に穴をあけて侵入し、有り金を根こそぎ奪ってトンズラする。それからというもの、スッカラカンで暮らしがたちゆかなくなり、姚安はやり場のない憤懣にまみれつつ悶え死ぬ。村人は筵にくるんで葬ってやる。

【解説】

出典は『聊齋志異』巻八。清初の蒲松齡の撰にかかるといわれる唐時代の伝奇小説の流れをくんだ文言の怪異小説集。全四百九十一篇。拙訳は意識とも逐語訳ともつかぬ半端なものである。柴田天馬訳（第三書館）の閲読をおすすめする。

色男の姚安、美人の緑娥を手に入れたはよいが、独占欲のおもむくまま、病的に束縛する。緑娥を一個の人格として尊重することなく、あたかもペットを愛玩のごとく、意思なきコレクションとしてあつかう。緑娥も緑娥で、「その気になれば、いつだって浮気できるわ」と挑発してみたり、不審な鍵をチラつかせて嫉妬心をあおったり、要らんことをする。姚安は猜疑心をつのらせ、いよいよ監視を強化する。緑娥の誤殺という悲劇は、もとより姚安の偏執狂的な嫉妬のなせるわざだが、緑娥の自業自得という気味もないではない。緑娥亡きあと姚安は、昼は幻視に苛まれ、夜は幻聴に悩まされ、次第に破滅へと追いこまれてゆき、ついに惨めに憤死する。（山田）

5. おわりに

以上、「嫉妬」を描いた作品を、現代文・古文・漢文から1作品ずつ提案したが、最後にこれらの作品

すべてを用いる方法として、高等学校学習指導要領解説・古典B「3内容（2）言語活動例イ」に示されている「読み比べたことについて説明したりする言語活動」を示しておく。

イ 同じ題材を取り上げた文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。

「読み比べ」することで、生徒は、文章を課題意識をもって主体的に読むことができる。「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章など」は、読み比べる文章を選ぶ視点を例示している。

例えば、書かれた時代は異なるが、同じ題材を取り上げた文章を読み比べることで、時代を超えて我が国の文化の底流にある、ものの見方、感じ方、考え方に触れることができる。

今回の提案では漢文も含まれているので、時代だけではなく国を超えて、人間の底流にある「ものの見方、感じ方、考え方」に触れることができるのではないかと考えられる。たとえば、「嫉妬」という感情を知るために辞書を引き、「自分よりすぐれたものをうらやんだりねたんだりする気持、やきもち、ねたみ。また、自分の愛する者の心が他に向くのをうらみ憎むこと。」（日本国語大辞典第二版）、「それまでだいていた優越感、愛情、独占感が突如他にしのがれるようになったことに気付いた時に感じる、ねたみの気持。」（新明解国語辞典第六版）と書かれているのを読んでも十全にはわからない。それに準ずる経験を書いた文章（物語・小説）を読んだ方がずっとよく、実感の伴うものとして体得、理解されるだろう。

「同じ題材を取り上げた」現代文・古文・漢文を手にとること、また読み比べることは、日常の読書においてなかなかできることではない。こうした教材の提案は、「教室」で読まれる対象である「言語文化」に広がりをもたせ、さらに「心情を豊かに」することに寄与できるのではないかと考える。教室で授業をすることができないとしても、これらの作品を読み比べることを通して、「嫉妬」とは何かについて言葉以前で了解していく道筋はできるのではないだろうか。

とはいえ、ここに挙げた教材は、いわゆる教育的配慮のもと、教科書に載ることはないだろう。しかし私たちはここに「文学を教育すること」の不可能性を示したかったわけではない。また国語教科書のあり方について異議を唱えたいわけでもない。ここに示したような文学作品の教材としての可能性を否定しないよう

なありかたを、「文学で教育する文学教育」及び「文学を教育する文学教育」に期待したい。(鈴木)

文 献

- ・ 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』2010
- ・ 『江戸川乱歩全集』講談社、1978
- ・ 田中聡『衛生展覧会の欲望』青弓社、1994
- ・ 和田茂俊「現実喪失者のめまいの論理 「火星の運河」「踊る一寸法師」「白昼夢」解説」中村三春編『ひつじアンソロジー 小説編1』、ひつじ書房、1995
- ・ 真淵和夫、国東文麿、稲垣泰一 校注・訳『新編日本古典文学全集 今昔物語集④』小学館、2002
- ・ 『日本古典文学大辞典』岩波書店、1984
- ・ 『日本国語大辞典 第二版 第六巻』小学館、2001
- ・ 『新明解国語辞典 第七版』三省堂、2012

(2015. 8. 3 受理)